

伊藤左千夫と三井甲之 その一

——その接近と対立——

明治期の根岸派短歌会の歴史を振り返るとき、「馬酔木」を主宰した左千夫が、入会して間もない三井甲之を信頼するあまり、「馬酔木」の後継誌「アカネ」の編集を甲之に任せたが、その甲之と左千夫やその門下との間に対立確執を生じて、左千夫が「アカネ」と関係を絶ち、旧「馬酔木」の歌人たちとともに、新しく「アララギ」を刊行するに至る時期は、この短歌会の最大の危機であったといえるであろう。

明治三七年に左千夫のもとに甲之が入門し、師事を始めた頃の左千夫の、甲之に対する評価、信頼はきわめて厚かった。その結果、今まで主宰、編集してきた根岸短歌会の機関誌「馬酔木」を休刊にして、かわりに「アカネ」を出すことにし、その編集を任せたのであったが、にもかかわらず、「馬酔木」から後継誌「アカネ」への引き継ぎがまだ完全に行われない時期から、二人の関係は怪しくな

り始め、間もなく深刻な対立に陥り、双方が相手を批判し罵倒し合うという、根岸派短歌会にとつては最悪の状態に陥つたのである。

この稿では、「馬酔木」「アカネ」「アララギ」「ホトトギス」などの雑誌の記事、伊藤左千夫・三井甲之・長塚節などの歌人の書簡、日記などを利用してその経過を明らかにし、二人の接近、共鳴や、また反発、訣別の理由を探り、あわせて、この事件の左千夫の文学に及ぼした影響についても考察することにした。

なお、既に「『アカネ』と『アララギ』対立の行方―左千夫・赤彦書簡を通して見た―」（『聖徳学園岐阜教育大学紀要』第十集 昭和五八年七月）と題して、この問題に関して取り上げたことがあるが、これは、「馬酔木」廃刊のあと、甲之の編集で「アカネ」が創刊され、根岸派の歌人たちは一度はこれに寄る。ところが、間もなく根岸派の歴史を顧みようとしない甲之の行き方に対する反発が

貞 光 威

もとで、感情の齟齬を生じ、藤真が「阿羅々木」を創刊すると、これに根岸派の歌人が徐々に移り、根岸派短歌会は二つに分裂、抗争が続く。この危機に際して島木赤彦の主宰する信州の地方的な短歌雑誌「比牟呂」が「アララギ」と合併したことが、「アララギ」にとって大きな支援となつて、この結社は危機を乗り切ることができ、かえつて「アララギ」の後日の発展の足固めとなつたことを、左千夫と赤彦との書簡を通して探つたもので、「アカネ」対「アララギ」「比牟呂」という結社の関係を中心に見ている。それに対して、今回は伊藤左千夫と三井甲之という人物の関係とその影響を見ようとするもので、目的とするところに違いがあり、先のが書簡を資料としたのに対して、今回は、書簡に限らず、雑誌の記事や会員の日記、回顧した文章など、できるだけ広く利用してゆくことにする。

一

最初に左千夫との対立の当事者である三井甲之の「馬酔木」への加入から見てゆくことにしたい。

甲之は明治一六年、山梨県中巨摩郡松島村長塚（現、敷島町）に、大地主の三井梧六の長男として生まれている。甲府中学から東京の私立京華中学に転じ、明治三十三年に第一高等学校に入学して、三

七年に卒業、東京帝国大学文学部国文学科に入学して、四十年に卒業している。

彼が根岸短歌会と関係を持ち始めるのは明治三十七年のことで、この年、彼は二二歳で、一高を卒業して東大に入学している。この年の四月に発行の「馬酔木」一〇号の左千夫選の選歌欄に「讚仏歌」と題して旋頭歌二首を発表したのが出詠の初めで、つづいて五月発行の一一号の同じく左千夫の選歌欄に「京に陶つくる友に」と題して短歌二首を載せている。甲之が左千夫に初めて会うのは、この年の九月二〇日に根岸の子規庵で開かれた子規の三回忌の歌会の席であった。明治三十七年一月六日発行の「馬酔木」一四号を見ると、この日の出席者が一名で、皆が「秋海棠」の題で歌を詠んだことが分かり、甲之も、この席で六首を詠んでいる。

その後も甲之は一〇月一六日（香取秀真宅で開催）、十一月二〇日（左千夫宅で開催）、と月例の歌会に出席したが、「馬酔木」の歌会記事からうかがえる。二月一日に左千夫宅で開かれた月例短歌会については、左千夫が二月一三日付の長塚節宛三五七書簡で、

歌会近來何時も盛だ十一日は九人であつた大学の連中四人が熱心なのハ頼もしひ

と述べており、甲之のほかに増田八風・近角常音・大須賀乙字などの大学生が歌会に出席するようになったことが嬉しくてならない様

子である。

翌、明治三十八年一月五日、三井甲之は左千夫宛に長文の書簡を書いて送っている。この手紙は、

新年の御慶目出度申上候、

昨夜「新仏教」新年号を読み候所、今迄先生に対し宗教に關し色々出鱈目申上候が氣になり候間申分け致度存候、御閑暇の節

御読み下され御目にかかり候節御批評御教示願上度候

という書き出しで、正岡子規の文学について、「馬酔木」が万葉集の糟粕を嘗めていゝという世間の見方について、高楠順次郎博士の宗教觀への疑問、境野黄洋の「宗教は人格の偉大なる顕現」という「新仏教」に載つた記事について、また左千夫が「馬酔木」に載せた「家庭小言」を読んでの感想など、思いつくままに書いており、特に人に示唆するところのある文章であるとは思えない。

ところが、これを読んだ左千夫は、二月二〇日に発行された「馬酔木」二の一の「雑言録」欄に、「宗教と文学」と題して「某大学生」の署名で掲載する。字数にして約四千九百字、「馬酔木」の誌面の四ページに余る長文である。左千夫は甲之の文章の後に、

以上予に宛たる手紙なり。説明解釈の空理よりは実験実行者たらんとの念に支配され居る予は此手紙に大なる同情を有するなり（左千夫）

と付記している。左千夫が、根岸短歌会に新しく加わつた甲之に並々でない期待をもつたことが分かる。

先の長塚節宛書簡のほか、明治三十八年一月七日付の久保田俊彦（島木赤彦）宛三七六書簡でも左千夫は、

貴兄故に明らさまに申上けるが以前の根岸歌会員と申候ても只今にてハ秀真麓義郎秋水多くは歌も作らず（出来ぬと本人は申居る）歌会へもロクロク出てこぬ始末に候時々歌を作られても馬酔木へ出すことの出来ないやうなものに候馬酔木の経営と云ふても長塚節と僕の三人にてやる訳に候其二人が地方に居る故雑誌だけハ僕一人にて万事をやるので逆でもロクなもの出来不申候現在のまゝにてもやつてゆければ結構だと思ふ位に候併し近来ハ歌会も漸く人数が多く成つて参り候つまり僕を中心とせる会に成つてしまひ申候新加入連ハ皆大学の文科若くハ理科の生徒にて相当なる素養有之候故大に望み有之ため意外な新展開を馬酔木に示すやも計られず候まつ多少の望ハ有ると御承知被下度候

と述べている。

また、同年二月九日付の篠原志都児（円太）宛三八九書簡ではアシビも遂に新作家が出てきて何となく賑になつてきた。

と記している。この手紙は篠原が「三ヶ日々記」という文章を「馬

「醉木」の原稿として送ってきたのに対して、不採用を宣告した、文末に「文章稿入用ならば御返し可申候」とある手紙であるだけに、新人（甲之）の有望を告げる文面は篠原の気持を傷つけただろうと想像されるが、甲之を門下に得た左千夫のこの頃の興奮を伝えるものといえよう。

一月二八日付の甲之宛の三八六葉書は、甲之のために雅号として「蒼念・紫峽・塩山」の三つを考えてやったことを知らせるものであるが、その冒頭に「拝啓 先夜ハ長坐失礼致し候」とある。甲之から一月五日付の宗教と文学との関係について述べた手紙を受け取って感動した左千夫は、一月の下旬にわざわざ三井甲之を本郷区追分の下宿先に尋ねて、長く話し込んだものと推定される。

三八年四月一〇日付発行の「馬酔木」二二には再び「某大学生」の名で「文学と宗教」という文章が載せられる。これは、前号の「宗教と文学」と比べると比較的にまとまっています。

文学の創作なる語は何か造り出す如くに思はれ候へ共決して造り出すものには無之、生活全体が文学にて其感情の高潮に達し候時溢れ出つるものが文学的製作と存候、宗教に於ても平生の生活直ちに宗教に有之申べく、深遠なる理想難解の教理の如きは閑な人間の附加したるものと存候

と冒頭に述べたあと、子規の「佐保神の別れかなしも来む春にふた

び逢はむわれならなくに」などの歌は一点の余裕もない中心の叫びで、理屈や解釈を用いない最高の文学であることなどを述べている。左千夫は今回も甲之の文章の終わりに、

左千夫言ふ、宗教の意義、文学の意義、詩と人格との関係、内容と形式との関係、材料と語調との関係等説き得て遺憾なきを覺ふ、斯の如く各方面に渡れる見解上の一致を得たるは予の深き歎喜に堪えざる所なれば敢て一言を添ふと書き加えている。

以上のように左千夫の書いた書簡を見、また彼の「馬酔木」に書いた文章などを見ると、甲之が根岸短歌会に加わったことに対する左千夫の喜びようは一通りでないことが分かる。

二

それでは、左千夫は甲之らの根岸短歌会に加わったことを、なぜそれほど喜び、その将来に期待を持ったのか。

短歌結社として、甲之の短歌の才能に期待をしたのであるのか。その点について、甲之が「馬酔木」に加わった明治三十七年の作を見てみよう。

讚仏歌 旋頭歌 (「馬酔木」明治三十七年四月)

青やまをから山なさむ火をも過ぎりて。慈悲の国力の国にいたらん我は。

足引の山も輝く海も輝く御仏の光りてりみつる我胸の内

京に陶つくる友に (「馬酔木」明治三十七年五月)

蟬の羽切りし筒袖前だれに君はゆくらむ京のちまたを
すえものゝ荷車ひきて清水を坂行く君か吾目にみゆる

秋海棠 (「馬酔木」明治三十七年一月)

秋海棠の花咲き出て、くれ竹の根岸の里に秋三たび来ぬ (根岸庵)

椽に近く秋海棠の花さきて昔を思ふ秋となりけり (同上)
川端のつまくれなるは実となりて今をさかりの秋海棠の花
秋海棠の花咲き出て、河の辺の吾家此頃蚊居らずなりぬ

朝川に洗物する笊の露のゆき来に濡るる秋海棠の花
秋雨の止まずふれ、ば書読むに飽きて眺むる秋海棠の花

以上の、三十七年の「馬酔木」に掲載された甲之の作品を眺めてみると、まず四月号の「讚仏歌」二首は、仏教讚歌という歌の性質上、また、あまり一般的ではない、五七七、五七七という形式をとる旋頭歌の制約から、歌としての特色はあまり認められない。次に五月号の「京に陶つくる友に」二首を見ると、習作の域を出ない、どちらかといえば稚拙なところの見られる作である。一月号の「秋海棠」六首は「馬酔木」に出詠するようになって半年あまりがたち、その間に左千夫から直接の指導をうけることもあったと考えられ、また、当日、子規の三回忌の歌会の席で左千夫などの指導もあったであろう。写生的な歌、抒情的な歌なども混じり、前のと比べると比較的に歌として整ってきている。しかし、この六首も全体としては習作の域を出ていない。

このように、甲之が明治三十七年に「馬酔木」に出詠した歌には、「讚仏歌」という宗教とかかわる歌が二首見られることのほかには特に目立ったものは認められない。そこで、明治三十八年二月発行の「馬酔木」二の一に左千夫が付記を付けて掲載したのが、「宗教と文学」という宗教と文学とのかかわりを論じた文章であることを考

えると、左千夫が三七年の末から三八年の初めの頃、長塚節や島木赤彦に宛てた手紙で、甲之らの結社に加わったことをひどく喜んでゐる理由に、甲之が仏教に対して深い信仰というか関心をもっていたことがあるのではないかと推測される。

左千夫と仏教との関係を考えるとき、まず想起されるのが、「新仏教」とのかかわりである。左千夫は明治三十三年一月に正岡子規のもとに入門して、本格的に作歌を開始するが、それから間もない八月に、仏教清徒同志会の機関誌「新仏教」に短歌を載せたのを手はじめに、同誌にしばしば作品を発表するようになる。そして、三六年には同誌の編集員になって、前にも増して宗教・家庭に関する文章や短歌などを掲載するとともに、同志会の例会に出席して、高島米峰・杉山縦横（楚人冠）等の幹部の人々と親交を深めた。この仏教清徒同志会というのは、明治三十三年二月に境野黄洋・高島米峰・杉山縦横・田中治六・安藤弘によって結成された団体で、イギリスの清教徒（ピューリタン）に倣って仏教を改革し、信仰と生活の純化をはかろうとしたところからこの名が付けられたが、三六年三月には「新仏教同志会」と改称された。この会は毎月、雑誌「新仏教」を刊行するとともに、例会を開いて、会員のみならず余所からも人を招いて講演会を催していた。この会はピューリタンに倣おうとするだけあって社会活動にも熱心で、足尾銅山の鉍毒被害者の救援、婦

人解放、廃娼、禁酒禁煙などの運動を展開した。

左千夫の作品で仏教的な作品ということになると、彼の晩年の傑作とされる「ほろびの光」五首（「アララギ」五巻一―号 大元・11）があげられよう。たとえばその第五首目の短歌

今朝のあさの露ひやびやと秋草やすべて幽けき寂滅の光

では、晩秋の暁の庭の草にひえびえと置く露に接した驚きを「今朝のあさの露ひやびやと秋草や」と叙した上で、しとどに露を帯びた庭前のただずまいには、すべてに極楽浄土のごとくに「寂滅の光」がただよっていると詠嘆している。

仏教では、煩惱を去って涅槃の境地に入ったときに真智の徳が清らかな光を発するといひ、そのような境を「寂滅」とか「常寂光土」とか称し、その光を「寂光」といつている。標題の「ほろびの光」は、「寂光」を大和ことばにしたもので、右の短歌では「寂滅の光」と漢字を当てている。

この一首は晩秋の早朝の庭の風景を歌うと同時に、その頃の彼の心象風景を歌っているのもあって、これは晩年にたどりついた彼の宗教的な境地を示している。

それに比べると、深みにやや欠けるところがあるが、初期の作品

にも彼の宗教的心情を示す作品がある。左千夫が明治三五年五月発
行の「新仏教」三巻四号に発表した、「鎌倉なる大仏をおろがみて
詠める十三首」には

鎌倉の大き仏は青空をみかさときつゝ万代までに

みもすそに手をふりしかば全き身の血汐し澄める心地しにけり

などの歌が収められている。前者は鎌倉の長谷の露坐大仏が青空を
天蓋のかわりとして、いつまでも衆生を濟度されることを願ひ、後
者では大仏の御裳の裾に触れたところ全身の血が清められた心地が
したと詠嘆しており、この連作には、篤い宗教的心情、大仏への敬
虔な帰依の心が見える作品となっている。

仏教への関心は左千夫の師であった正岡子規にはあまり見られず、
子規門の双壁として左千夫とよく対比される長塚節にもそれはほと
んど認められない。それに対して、左千夫には、作歌を始めた頃か
ら仏教への関心がきわめて深かったのである。

そのような左千夫のもとに甲之が現れたところから、左千夫は甲
之に深い関心をいだいたものと推測される。

三

甲之は明治三三年に第一高等学校に入学、左千夫のもとを訪れた三
七年には一高を卒業して東京帝国大学文科国文科に入学してお
り、四十年に東大を卒業している。彼は一高時代から東京本郷森川町の
求道学舎で親鸞聖人の教えを説いていた近角常観の説教を聴いて感
化を受けており、仏教への関心を深めていた。甲之が最初に「馬酔
木」に出詠したのが「讚仏歌」であるのも、そのためである。

また、恐らくそれまでに二回しか左千夫宅を訪問していないと考
えられる甲之のところへ、主宰者である左千夫自身がみずから訪ね
て長い時間話し込んだのも、一月五日付の宗教と文学について述べ
た手紙を受け取って、信仰の上で共鳴した、その喜びを伝えるため
の訪問であったと推察される。四月一〇日発行の「馬酔木」二の二
に「某大学生」の名で掲載された、甲之の書いた「文学と宗教」は、
左千夫の甲之訪問の後に書かれているところから考えると、左千夫
の勧めで執筆した可能性が高い。

二月二八日付の左千夫の赤木格堂宛三九八書簡はその最後に三井
甲之について、

小生の二なき話相手に候。親鸞の信仰者にて甲州の人に候
と書いているが、「話相手」というのは、歌よりも主として信仰に

ついでの話相手であったと考えられる。

甲之が初めて根岸短歌会に出席した、明治三十七年九月二〇日に開かれた子規三周忌歌会の後の、毎月の例会の模様を「馬酔木」の歌会記事や左千夫の書簡などを通して探ってみると、次のとおりである。

期	日	会場	出席者	甲之
明治三十七年	一〇月一六日	香取秀真宅	一二名	出席
	十一月二〇日	左千夫宅	八名	出席
	十二月二一日	左千夫宅	九名	出席
明治三十八年	一月二五日	山田三子宅	八名	出席
	二月二七日	山田三子宅	八名	出席
	三月二六日	下谷根津権現	八名	出席
	四月九日	小石川愛知館	四名	欠席
	五月一四日	香取秀真宅	七名	出席
	六月二一日	無一塵庵	四名	出席
	七月九日	左千夫宅	三名	欠席
	九月一九日	田端筑波園	一名	不明
	十一月二二日	左千夫宅	五名	出席
	十二月一〇日	左千夫宅	三名	出席

上記のように「馬酔木」の東京での月例の歌会が行われている。明治三十八年八月には酷暑の候で歌会は行われなかったらしい。前年も行われた形跡がない。一〇月には「馬酔木」誌上にも左千夫書簡などにも例会のことが見えない。もしかすると、ちょうどこの頃は左千夫が「野菊の墓」を執筆中で、多忙のために例会を止めたのかも考えられる。

上に挙げた一三回の例会のうち一〇回に甲之が出席したことが判明し、欠席は二回、三十八年九月の例会は期日や出席者の数は「馬酔木」二の六（明治38・10・31）の「左千夫記」とある「竹乃里人先生四周忌」という記事から分かるが、談話だけで終わって、歌は詠まなかったため、出席者の顔ぶれは不明で、甲之の出席したか否かも不明である。一名と出席者が多いし、子規の忌日にあたることから、出席した可能性が大きい。

結社の主宰者の指導する中央の歌会でありながら出席者が三名とか四名とかいうこともあるわびしい歌会であっただけに、甲之がほとんど毎回、時には増田八風など友人も連れて参加してくれることは左千夫にとって何よりの喜びであったと思われる。

四

左千夫と甲之との関係が深まった結果、左千夫や彼の主宰する根岸短歌会に変化が現れる。

その第一は、明治三八年四月一日発行の、近角常観の仏教雑誌「求道」(二の三)に左千夫が初めて「藪柑子」一五首および「三月十日木下川梅園を見る」五首を発表し、この雑誌と交渉をもつようになったことで、甲之の導きによるものと考えられる。

第二の変化は、毎月子規の忌日である一九日に「十九日会」と称する宗教的な会合を始めたことである。四月一〇日発行の「馬酔木」二の二には

四月十九日を始めて自今毎月左名の如き会設け候間同志諸

君の来会を望み候

● 十九日会

一、本会は毎月十九日竹乃里人先生の忌日を以て「アシビ」発行所に開く

一、本会は趣味と信仰との交話を目的とす

一、本会は午後一時より十時に至る間に於て去来随意とす

一、本会は会費を要せず、主人茶を用意す、客茶菓を携ふるを妨げず

一、本会は入会退会等の規定を設けず

一、本会は竹乃里人先生に対し敬意を有せざるものを斥く

と掲載されている。署名はないが、左千夫の筆であろう。四月一九日にはその第一回の会合が開かれ、山田三子・石原阿都志(純)・藤真・近角常音・三井甲之が集まり、文学と宗教の関係について話し合ったことが、五月二九日発行の「馬酔木」二の三の「十九日会記事」という文から分かる。話し合った内容については、「十九日会記事」に、

趣味と信仰との関係に就て考究談話をやるといふことは、吾々が始めてであつて頗る興味あり且つ有益なことであらうと云ふ説は一致した、この問題に就て今暫く考究の上、議論を発表するといふ事で散会

と記されている。

右に示した、四月一〇日発行の「馬酔木」二の二の「十九日会」という案内には、会の目的について、「一、本会は趣味と信仰との交話を目的とす」と「交話」という見慣れぬ言葉が用いられているが、これは二の三の「十九日会記事」に「趣味と信仰との関係に就て考究談話」とあるのにあたるのである。後のことになるが、明治四一年一二月二四日付で岡新治(千里)に当てた手紙で甲之が、左千夫が宗教云々といひまた十九日会を開きしが如き小生が同

窓とともに同氏と交際したる故に有之

と述べているのを見ると、「交話」は、ヴントなどの哲学に関心をもった甲之、またドイツ文学を専攻した増田八風など、新しく加わった学生たちの影響によって生まれた言葉であると考えられる。

「十九日会」は、以後、五月・六月・七月・九月・一〇月・十一月・一二月と続けられてゆくが、五月は左千夫だけで他に誰も来なかつたようである。八月は歌会と同様、夏の休み、九月は子規の四周忌ということで、田端筑波園で歌会と兼ねて行われ、一名の出席であつたが、歌は作らずに談話だけで終わつたと「馬酔木」二の六の「竹乃里人先生四周忌」という文章にある。その他の月は大体三、四名といった参加者であつたが、甲之のほかに増田八風、石原純が良く出席している。左千夫が出した十一月八日付の石原純宛五・一六書簡に、左千夫が三井甲之・増田八風・近角常音の三人といつしよに蜂須賀家の書画の展覧会を見に行った際に石原純を誘わなかつたことについて断りを述べているが、これらの人々が「十九日会」の常連であつたようである。増田八風・近角常音は甲之と同じく東京帝国大学の学生で、そのうちの近角常音は、「求道学舎」を開いて親鸞聖人の教えを説いていた近角常観の子であるから、いずれも信仰によって結ばれた仲間であつたと思われる。石原純は明治三六年七月発行の「馬酔木」二号から出詠した歌会の先輩格であるが、

彼も東大の出であつたことから、この時期に甲之らと親しくしていたものと思われる。

「十九日会」でこのような学生たちが活発に議論をしたり、出席者の少ない歌会に学生たちが出席するのを左千夫は頼もしく思つたようで、三八年十一月一六日付の長塚節宛の五一〇書簡で左千夫は、甲之が君に手紙やりたいと申居候同君八実吾々唯一の後継者に彼を得て僕も漸く安心するを得たり彼ハ信仰より来れる故思想堅固なるか最頼しひ

と「馬酔木」の後継者と言つて称賛している。この文面から、左千夫は甲之の信仰心を最も重視していたことが分かる。

左千夫は三八年九月六日発行の「馬酔木」二の五に、「趣味と信仰」という文章を載せる。雑誌の巻頭にこの文章を掲載したところに、この時期の彼の宗教を重視する態度がうかがえる。前号、二の四の「消息」欄には、次号に「文学と宗教」という記事を載せることを予告しているが、これが題を変えて「趣味と信仰」となつたのであろう。この文章は、六月の「十九日会」の報告をし、その後で甲之から来た手紙を紹介しながら、左千夫の宗教と文学との関係についての考えを述べたもので、信仰と趣味は互いに助け合うことによって共にその働きを全うすることができる」と記している。

明治三九年一月一日発行の「馬酔木」三の一には左千夫が書いた

と推定される「巻頭言」があつて

信仰は直に人間の価値なり

詩は価値ある人間の真実なり

而して人間の真価値、亦詩を待つて現はる

と記され、同じページに書かれた「絶対的人格 正岡先生論」と

もに、宗教的な人生観、文学観が著しく強く出ているが、これも甲之からの影響が大きいと考えられる。

「馬酔木」三の一が刊行されて間もない明治三十九年一月、同人たちは甲州御嶽で吟行会「御嶽歌会」を開いている。二月一五日発行の「馬酔木」三の二の巻頭の「御嶽乃歌会」は八ページにわたる長文の記事であるが、この記事や、甲府の同人であつた神奈桃村の日記（『左千夫全集』巻八）などから、この会には、神奈桃村・森山汀川・久保田柿人・村山蟬室・三井甲之・増田八風・蕨真・伊藤左千夫の八人が参加、石原純・岡千里・両角竹舟郎、柳沢広吉の四名は出席を約束していたが、支障を生じて出席しなかつたことが分かる。東京・山梨・長野の同人たちが七日に甲府に集まり、その日は昇仙峡に遊んで仙娥の滝などを見たあと大黒屋に投宿、深夜まで作歌、翌日は神社に参拝、溪谷の美を嘆賞しつつ甲府に出て、その在の松島村（現、敷島町）の甲之の家に八日、九日と泊まって、一日に解散して帰宅したものと推定される。この会の立案、案内等は、

昇仙峡が三井甲之の生家にごく近いところから見ても、彼によつてなされたものと考えられる。「馬酔木」に歌を出すようになって二年、歌会に出席するようになって一年半に近くなつたこの時期には甲之の「馬酔木」の歌会における位置が高まつてきていたことが分かる。

五

左千夫は胡桃沢勘内宛の三十八年五月二五日付四二五書簡で、

馬酔木非常に遅れて読者諸君に申訳なく候へとも何もかも一人ではなかなか容易なものに無之

と述べている。「馬酔木」の遅刊をわびる言葉は左千夫書簡の各所に見られ、胡桃沢勘内にかぎらず、同人の多くから刊行を催促する手紙がきていたことがうかがえる。長塚節宛の同年一月上旬（推定）に書かれた五〇八書簡では、

馬酔木を売る手段ハ一に挿絵二に広告三に発行期励行（中略）

僕も小説が書ききれないで今日も書いてあるそんな訳で忙しいと書いている。定期的な刊行の大切さが分かつていても、左千夫には思うに任せぬ、小説の執筆という事情があつた。同じく節に宛てた翌、三十九年二月七日付の五五三書簡でも、

僕ハ又小説をかくつもりだなかなか忙しい

と述べている。また、明治三十九年二月八日付の久保田俊彦宛五五四書簡には、

小生が馬酔木の発行を生命と致し居れハ何の事ハなく候へとも小生とて何か外にやり度き思山々に候故馬酔木のために全力を傾けること随分当惑致し候やりかけた事故小説も今少しやつて見度候新体詩も勿論に候

という言葉が見える。

斎藤茂吉は「アララギ二十五巻回顧」(「アララギ」二十五周年記念号)において、

馬酔木の末期には、左千夫は小説も作るやうになり、また日本新聞の選歌をも擔当したので馬酔木のみ専念することが出来ず、また連年大水害に逢会して、馬酔木の発行がなかなか思ふやうに行かぬやうになった。そこで三井甲之に雑誌編輯の如き為事を任せることにし、新に雑誌アカネを発行したのは明治四十一年二月であつた。

と述べている。

ここで左千夫が小説執筆に多忙であつた点について見てみると、彼は明治三八年の秋頃から小説「野菊の墓」の執筆に取りかかり、三十九年の一月の「ホトトギス」にそれを発表した。出して見ると「読売」「朝日」などの新聞の批評も好意的で、夏目漱石からも「只今

ホトトギスを読みました。野菊の花は名品です云々」の賞賛の手紙を受け取り、俳書堂から単行本として刊行することも一月のうちに決まった。このような事情から小説家として立つ野心を強めていたので、牛を飼いながら、作歌をし、小説を書き、その上で「馬酔木」の編集をすることを、大変な重荷と感ずるようになっていたのである。おまけに、新聞「日本」の選歌も担当することになっていた。明治三十九年以後の「馬酔木」の刊行の状況を見てみると、

第三卷第一号	明治三十九年 一月 一日
第二号	二月 一五日
第三号	三月 三一日
第四号	五月 二三日
第五号	七月 二五日
第六号	一〇月 一二日
第七号	一二月 二〇日
第四卷第一号	明治四〇年 三月 八日
第二号	五月 二五日
第三号	明治四二年 一月 一日

のようになっており、明治三十九年の後半に入つて発行の遅れがひど

くなっている。この時期は、左千夫が小説「野菊の墓」を書いて成
功し、それに自信を深めて小説や写生文を左記のように次々と書い
ていった時期にあたる。この頃に左千夫が書いた作品は次のとおり
である。

野菊之墓	小説	「ホトトギス」	明三十九年 一月
八幡の森	写生文	「馬酔木」	明三十九年 一月
秋霧	小説	「馬酔木」	明三十九年 二月
河口湖	写生文	「ホトトギス」	明四〇年 二月
或ゆふべ	写生文	「趣味」	明四〇年 四月
水籠	写生文	「ホトトギス」	明四〇年 二月
隣の嫁	小説	「ホトトギス」	明四一年 一月
春の潮	小説	「ホトトギス」	明四一年 四月

左千夫がこのように、散文、特に小説に熱を入れたのは、小説と
いうジャンルに文学としての可能性を見、興味を抱いたことももち
ろんではあるが、もう一つの大きな理由として、この頃、左千夫の
営む牛乳搾取の仕事が、この仕事を始めた頃ほど経営に時間をさけ
なくなること、競争の激化、洪水に逢って牛が倒れたり、牛乳を
出さなくなったりしたことなどから、経営に破綻を来しつつあつ

て、経済的に苦しく、稿料の入る小説執筆に期待せざるを得なかつ
たという事情もあつた。

左千夫は七月二日付の長塚節宛六〇〇書簡で、「馬酔木」の発行
について、

小生は定りたる考無之候やれるまでやつて出来なくならハ止め
可申候従て是非やりとほし度執心も無之候

と書いており、「馬酔木」の発行にやる気を失っていたことが分か
る。

また、明治四〇年五月二五日発行の「馬酔木」四の二を見ると、

「消息(五)」に、

出来るならば吾馬酔木も毎月発行致度候へども実際のところ、小
生一人の手にてはそれは六つかしく候、されは今後早く公表致
度存諸君は「日本」若くは「趣味」へ投稿願上候、一度に多く
発表致度き諸君は、「馬酔木」へ投稿希望致候、我作歌を百世
に伝へんとするの抱負ある諸君は、雑誌発行の遅延位に屈托す
るなからんことを希望致候

とある。左千夫の「馬酔木」編集がいよいよ行き詰まってきたこと
がうかがえるとともに、「発行の遅延位に屈托するなからんことを
希望致候」と一種の開き直りを見せているのが注目される。左千夫
は、発表を急ぐ場合は「日本」または「趣味」に原稿を送るよう

言っているが、「日本」は、正岡子規の時代から根岸派と深い関わりのある新聞で、ちょうどこの年の六月一日から左千夫が選歌を担当することになっていた。左千夫はこの選歌を四二年一月二五日まで続ける。また「趣味」は、明治三二年には根岸短歌会の創立にかかわり、三六年には左千夫とともに「馬酔木」を創刊した岡麓が三九年に開いた出版社の彩雲閣から発刊された雑誌である。

しかし、同人の中には左千夫のこのような言い分には承知できない者も多かったようで、左千夫が書いた四〇年一月一日付の胡桃沢勘内宛八四〇書簡を見ると、

玉葉拝見馬酔木(今月中ニハ出来るだらふ)の催促御尤なれとも草庵にてハ昨日漸く畳を敷しなどにて居住平穩を得ざる五十日に及び候今日とて全く旧に復したる訳ニハ無之候

と「馬酔木」の催促を受けて、水害のため仕事がかどらない旨の言い訳をしている。「今月中ニハ出来るだらふ」と書いたが、その発行は遅れに遅れて、翌年の一月一〇日になって、ようやく刊行された。左千夫は十一月二十一日付の蕨真宛八六〇書簡でも、

馬酔木は如何せしと問はれ候程困しき事ハ無之候斯様に延引致候事ハ三通四通の事情有之候(中略)兎三角今後小生一人にてハ到底出来ぬ事と存候出来さうに考られて出来不申候それに就ても御相談有之候

と書いている。蕨真も「馬酔木」の発行の遅れについて苦情を左千夫に言つたらしい。左千夫は弁解しながら、解決について相談を持ちかけている。

信州で「比牟呂」を主宰し、「馬酔木」の信州支部の代表といった格にあつた久保田俊彦も、四〇年一月二六日付の、同人の平福百穂に宛てた書簡で、

馬酔木遅刊小言諸方ニ聞エ候左翁何ト思居リヤ

と不満をもらしている。胡桃沢勘内が左千夫に催促し、久保田俊彦が平福百穂に不満をもらしているところから見ると、信州の「比牟呂」の同人たちの集まりなどでも「馬酔木」の発行の遅れが問題になっていたであろう。「馬酔木」の刊行の遅延は、今やどうにもならないところまで来ていたのである。

六

「馬酔木」のこのような刊行の状況を見て、森田義郎が明治四〇年一月二一日、左千夫のところへ来て、「馬酔木」の編集をやりたいと申し出たらしいことが、先に引用した左千夫の一月二一日付、蕨真宛八六〇書簡からわかる。そこには、

昨日は格堂来り今日は義郎来る(中略)義郎君ハ全快して今何

も仕事なき故やらしてくれと今日も申し居候

と記されており、この文面からすると、前から編集を申し出ていた森田義郎のほかに、その前日には赤木格堂も左千夫宅を訪れているらしい。「馬酔木」の今後のあり方について話すために来たものと考えられる。義郎も格堂も子規在世当時の根岸短歌会の同人で、特に格堂は生前の子規の信頼が厚かったから、左千夫に遠慮して「馬酔木」にはそれほど積極的に携わっては来なかったが、同人の中では最高顧問といった形であった。

一二月五日には蕨真が千葉県山武郡から上京して、左千夫宅に泊している。「馬酔木」の善後策について左千夫と話し合ったものと見られる。ちょうどこの日、五日に長塚節は岡麓宛に書簡を送つて、

伊藤君は蕨が上京するから雑誌の相談をすると申候へども、蕨は到底歯牙に懸くるに不足、貴兄は十分貴兄の意見を表示して局を結ばれむことを望み候

と述べている。もう、この頃になると、「馬酔木」の主な同人たちはそれぞれに、今後の機関誌のあり方について、直接に会って話し合ったり、手紙で連絡をとったりしていたものと考えられる。

「馬酔木」の編集のことについては、左千夫に最も近いところにいた三井甲之も考えていたようで、左千夫が一二月四日付で胡桃沢

勘内に宛てた八六五書簡に、

小生自らも頗る持余し申候三井甲之君が引受けて大にやつて見様かなと申候故相談中に候

と書いている。左千夫は五日に甲之と会った模様で、左千夫が書いた同日付の三井甲之宛八六六書簡に、

拝啓 先刻ハ失敬仕候只今蕨君出京致候間明六日午前早く御たつね可申上候御在宿成被下度願上候

とある。甲之が帰った後に蕨真が上京してきたのであろう。左千夫はその五日の相談の内容について、やはり五日付で、名古屋の同人の依田貞種宛に八六七書簡で、

馬酔木善後策ニ就き只今蕨君も上京中にて相談致居候三井甲之君が万事を引受け彩雲閣にて発行せんとの協議まつまり申候内容従来之歌及歌論ニ加ふるに若手連の評論時文紹介欧州文壇の消息等を加へ六十四頁の清素なるものを出す筈に候つまり今の馬酔木を拡張したるものに候二月一日を以て初刊を出す筈に御坐候小生は今後助成者の位置ニ立ち万葉新釈の稿を急ぐ覚悟に候馬酔木の名は改めた方売るに都合よからんとの事にて改題するつもりに候へともあれかこれか未だ決定不致候得とも発行の画策ハ決定致候今日蕨三井小生と岡氏を訪問帰りニ格堂も訪問兎二角発展を喜び申候次第二候

と詳しく報じている。五日の午前には藤真と本郷区台町の鶴栄館に三井甲之を訪ねたが不在で、神田区今川小路の岡麓宅に行くと、そこに甲之がおり、そこで四人が協議、甲之が編集主任となり、二月一日に新雑誌の創刊号を岡麓の経営する彩雲閣から発刊することで協議がまとまり、岡宅を出て、三人で九段の赤木格堂宅を訪ねて報告をしたのである。左千夫は長塚節に対しても、一月一七日付の八六九書簡において、

馬酔木三の四ハ必ず年内中に出来申候六十頁許の物なり三井の雑誌ハ改題と極り候三井君よりも通知ありし事と存候僕ハ少しく閑を得て創作に耽ることが出来るかと愉快に候

と知らせている。右の手紙の「馬酔木三の四」は「四の三」の誤りであるが、「馬酔木」の終刊号は結局年内には出ずに、四一年一月一〇日に発行になり、甲之の編集になる新雑誌「アカネ」は二月六日に創刊号が発行される。

七

このように見てゆくと、「馬酔木」の発刊が遅れに遅れてどうにもならなくなったとき、伊藤左千夫・藤真・赤木格堂・岡麓・三井甲之などが相談して、その善後策として、甲之の編集で「アカネ」

と改題して、明治四一年二月一日を期して岡麓の経営する彩雲閣から発刊することに比較的スムーズに決まったように見えるが、実際の経過はそのように平穏なものではなかった。

左千夫も甲之も共に激しやうい性格の持ち主で、うまくいっている時は良いが、対立しだすとそれが激しく、憎しみにまで発展してしまうことがあったらしい。

まず、明治三九年一〇月一二日発行の「馬酔木」三の六に掲載の「八面歌論」などから次のようなことが分かる。六月一〇日の俳書堂で開かれた定例の六月歌会には、左千夫・長塚節・藤真・藤桐軒・香取秀真・甲之・石原純の七名が出席したが、「馬酔木」三の四に掲載された「風暖」の題で発表された、

菜の春を雨一夜降り朝ぬるみ蟹網張るも前の小川に

の第一句、「菜の春を」の是非をめぐって、左千夫と、石原純を除く全員との間で激論となり、延々五時間に及んだ。この時の急先鋒が甲之であったらしい。左千夫は歌会に出席していた長塚節宛に六〇〇書簡で、七月二日付で、

三井君其平気でやつてくるつまり思ふ事を極端にいう男であるらしく別に邪念はないのに候

と書いてある。左千夫は六月一〇日の歌会の席の激論から、甲之がもう自分のところへ来なくなることも予想していた文面である。

つづいて六月一九日の「十九日会」では左千夫・甲之・増田八風・木村芳雨の四名が出席したが、甲之の劇詩「日本武尊」をめぐって、左千夫と甲之の間に激論が展開されたことが、『左千夫全集』巻八に掲載の「木村芳雨日記」から分かる。

次の対立は石原純の「驢耳弹琴集」をめぐってのもので、石原純が「馬酔木」三の四に発表した「驢耳弹琴集」と題する短歌四一首の後に左千夫が付記して、

左千夫いふ、今後の歌壇は如何に向上の発展を遂ぐべきか、思ふに是刻下の問題なり、以上純氏の諸作に就ては予は未だ完全を認めざるも、氏が深く考ふる処あるを認むるに足れり、識者願くは作者の精神に鑑みるところあらんことを

と褒めた。これに対して、甲之は「馬酔木」三の五の「詩歌製作の衝動と其表現法を論じ現時歌壇の病弊を指摘す」という長い標題の評論の中で、石原純の「驢耳弹琴集」の「歌を評さむ」として、その中の

春月や榎の枝さす白梅の氷れる葢に声のすらしき

の歌について、

如斯歌は感情に重きを置かず趣向を主として居るのである。和歌の特徴を捨て、俳句の短所を学んだものである。

などと四五行にわたって手厳しい批判を加えている。これは、石原純の歌の批判というだけでなく、純の「驢耳弹琴集」に付記を書いて褒めた左千夫の鑑賞眼を批判した文章となっている。

同じ「馬酔木」三の五には、右の甲之の評論につづいて、「甲之生」の名で、「『あやめ草』を読む」と題する評論も載っている。

これは野口米次郎が編集主任となつて編んだ、日英米の詩人の合同の英語の詩集「あやめ会詩集」の第一巻で、会員は欧米人が二〇人、日本人が一人である。甲之はこの評論で

日本では和歌俳句の外に吾人が認めて詩の価値ありと思ふものは無い。所で和歌俳句なるものは詩として今日の文明に適應したる完全の形式を有して居らぬ。

と述べ、野口米次郎の英詩について、

西洋人の作よりわかりようやうだ。現代の日本語は詩語としてはとても英語にはかなはぬ。(中略)庭下の植物を扱ふ如き、人形師の人形を扱ふ如きことばかりして来た平安朝以後の文学者文学。其余響に身を慄はして居る現代の詩人及詩、是非西洋の真似をせねばならぬ。

と短歌結社の機関誌の評論とは思えない西洋崇拜を丸出しにした文章を発表している。

左千夫はこれに、

左千夫いふ、西洋の真似をせねばならぬとは如何なる心によ。

詩作の稽古といふならば兎に角真似た作物に詩の価値はない。

と付記した。この付記は、左千夫が甲之に対して批判的な言葉を記した最初のものである。普通の場合ならば、主宰者はこのような文章は不採用にしてしまうのであろうが、「馬酔木」の経営に熱意を失ったこの時期の左千夫にはそれができず、付記を書くにとどまったものと見られる。批判の言葉を甲之のように長々と書かなかつたのは、それを大人げないと思つたのかも知れない。

左千夫と甲之の二人の關係が順調でなくなつたことは、左千夫の明治三九年一月七日付の蕨真宛六七五書簡からもうかがえる。ここでは、

三井君はアシヒと關係を絶ちたいなと、申来候我執のつよい人に候

と知らせている。

それから日がたつて、明治四〇年二月二一日という、既に甲之を編集者にして、新しい名で雑誌を彩雲閣から出す約束ができたあとであるが、この頃になつて久保田俊彦から左千夫に、信州に来

た甲之が左千夫について大いに不平を述べた便りが来た。それに対して、左千夫は久保田宛八七二書簡で、

貴書拝見御来示ノ赴小生ニハ只意外ニ感ジ申候何カ三井君ハ小生ノ悪口テモ申候ニヤ感情問題ナドトハ如何ナル事ニヤ小生ニハ更ニ解リ不申候

という書き出しで、「馬酔木」が左千夫一人では手が回りかねるようになったので、甲之に編集を任せることにした。甲之が雑誌の名を改めないといけないというので、それも許し、短歌だけでなく、俳句や劇評なども入れて、内容を拡充し売れるものにしたという申し出も、任せる上は口出しをしないことにして皆認めたのに何の不平があるのか分らないと述べる。そして、甲之の不平は、左千夫が「ホトトギス」に原稿を出していること、また甲之の出そうとしている新しい雑誌を助けないことにあるらしいという。そうして左千夫は「小生ハ実ニウルサクテ溜ラス」「世間氣ノ多イ人達ハメンドウデカナハヌ」などと述べ、

三井君ノナス所根岸趣味ニ反スル様ナ場合ニハ蕨君ハ更ニ資力ヲ尽シテ別ニ雑誌ヲ起サントノ覚悟ヲ誓ヒテ帰国致候

と報じている。この手紙は、四〇年二月五日の左千夫・蕨真・甲之・岡麓の四人による協議の内容を最も詳しく記した文書として貴重であり、同時に、この時点で、左千夫も蕨真も甲之に対して幾ら

かの不信感を持っていて、機関誌の編集を甲之に任せると破綻をきたすかもしれないと危惧する気持ちのあったことをうかがわせる。

それから一週間あとの二九日付の長塚節に宛てた八七四書簡で左千夫は、

三井の雑誌ハ何と名つけるか未だ云ふてこぬ（中略）三井ハ実に陰險な男だ大ニ注意を要する信州へ往つても僕の事を何とか云ふて歩いたさうだそれで僕か今度の雑誌を助けぬとおこつてゐるとの話だか僕の陰口を云ふこと非常らしい云く野菊の墓を作つてもう立派な著作家になつたつもりで居るとかそれから歌も駄目になつたとか鷗外の歌会へ出て大家気取でゐるとか人を弟子あつかひするとか随分冷酷な悪口を云ふてゐるらしい僕ハ何と云はれても平氣だがそんな人間と交際するか馬鹿々々しくてならない僕の所などへ来くれねハよいに実にいやな男だ作物の批評でない悪口はいくらなんでもいやだ

と、長年つきあつてきた親友と信じて、真情を隠すことなく吐露している。右の文中の「鷗外の歌会へ出て」というのは、鷗外が根岸派と明星派とを接近させようと、それぞれの派の代表歌人を自邸、観潮楼に招いて「観潮楼歌会」を催し、左千夫が四〇年三月から出席していたことを指す。

二九日付の手紙では、あれほど甲之のことについてこぼしていた

のに、その二日後の三一日付の長塚節宛八七八書簡では、

いよいよ今年もおしまひに候。先日三井君に対する事種々申上候へども、其三井に逢候へば何事も無之候。ホトトギスへ歌を出すといふ事に就き誤解して居つたらしくホトトギスの歌を止め致候処、それより大に円滑に相成候。新雑誌は「アカネ」と定め小生^{ママ}命名致候。そんな訳故まづ平穩と御承知被下度候。と言つており、万事円満解決したかのような文面であるが、この「円滑」「平穩」はあまり長続きしないで終わる。

年が改まつた明治四一年の依田秋圃宛の八八二の年賀状には、

今七日始めて賀状を書き申候

七人の子の親なれは何事も手まはりかねつうとしと思ふな今年は少し小説をやつて見やうかと思ひ候

と記されている。この歌は諸方に出した年賀状にも記されているが、この賀状から、子供の世話や、牛乳搾取の仕事に忙しかった左千夫の、「馬酔木」の編集の仕事から開放されて、小説の執筆に専念したい願いがうかがえる。なお、一月一日の「ホトトギス」には左千夫の「隣の嫁」が載った。

このような状況の中で、明治四一年一月一〇日、「馬酔木」四の三の終刊号が発行された。四の二が出たのが四〇年五月であるから、八か月ぶりということになる。そして「アカネ」の創刊号は予定

横山寛吾先生を送る

横山寛吾先生は平成七年三月三十一日をもって定年により退休なさることになりました。先生は昭和五十七年に本学に着任されて以来、十三年間、漢文学の研究に専念されるとともに、その間、附属学校部長、図書館長もつとめられ、学生の教育にも格別にご熱心に、温かくご指導くださいました。

先生が私どもの「岐阜教育大学国語国文学」にお書きくださった論文だけでも十一編を数えます。そのほかにも「岐阜教育大学紀要」など、各方面に研究の成果を発表なさっていて、先生の学問に対するひたむきな情熱に私ども後輩はいつも敬服しておりました。漢文学を研究したいという学生が先生の卒業研究ゼミに毎年あのように多く集まったのも、先生の豊かな学殖に魅せられ、温かいお人柄にひかれたのだと思います。

ここに、長年のご指導に対して、岐阜教育大学国語国文学会の学生、教員一同を代表して心からお礼申し上げます。

横山先生、どうかこれからもますますご健康でご活躍くださるとともに、私どもをいつまでもお導きください。

岐阜教育大学国語国文学会会長 貞光 威

よりすこし遅れて二月六日に刊行された。

明治四一年一月一〇日に「馬酔木」終刊号が、二月六日には「アカネ」創刊号が、それぞれ刊行され、やがてこの二つが抗争を繰り返し、四十二年六月の「アカネ」の休刊まで続いた経緯と、左千夫と甲之との出会いと反発が左千夫の文学にもたらしたものについては、紙幅の関係から次号に回すことにする。